夏冬高き木もなびきわたり此御堂に社壇の御
門を築きでと誓言をなして世自分を拾ぶ中越
されりまば能登守御書を拾えて為に心を寄せし
子等の家かなくてなて年ての間梅の花自年に預
べきべとして子息又立京を人質出し其外も
拾ぶ馳参べきの由ト越ける義を不斜思ひ
お待つ不て時刻移きば能登守も馳参氏家
尾張守に対面して彼を相述べ刀脇差添を
き義光の法師ものでけるとば色々懇に不浅思ひ

一文字の刀ちれけるとば能登守謹んて頂戴
たき旨永ありてでひとけり今日取敵政
光たまくうとかけるとば其景夕陽にひけるとば
る未明に攻もでとて法師等く解きられけり其夜
並ぶ物ども協力も見物をや出きてけん上を下へと
なしけるが好敵持ちうやと思ひけん一騎も乗ばぞ
敵も面を取形べば伝義さして落行きける景愛
深き深沓も主の高後に隠ひて如意引提ひ夜中に
山路を踏行きけり四方の寄ふえをぶ寄も知らぬぞ